



<略歴>

1948年生まれ。白老町在住。
中学生の時のアルバイトがきっかけで、木彫りの道に進む。
50年以上の経験から木の性質を理解し、素材自身の美しさを表すことに重点を置きながら制作を続けており、これまで全国各地の木彫りの実演や展示販売会に参加してきた。
現在は地元の小中学校へ赴き木彫の講座講師を務めるなど、若年層の人材育成にも尽力している。

<受賞歴>

- ・北海道ウタリ協会（現北海道アイヌ協会）主催 アイヌ民芸品コンクール北海道知事賞（1990）、北海道議会議長賞（1992）
- ・北海道アイヌ伝統工芸展（北海道アイヌ協会）優秀賞（2015）
- ・優秀工芸師（北海道アイヌ協会）認定（2016）
- ・アイヌ工芸作品コンテスト（当財団）優秀賞（2021）、入選（2022）

吉田 信男
Nobuo
Yoshida

「想いが届く作品をつくり続けたい」

木彫との出会い

“中学2年生の時に、熊の毛彫りをするアルバイトに行った。そこで、3カ月か4カ月ぐらいしたら、彫り方覚えちゃった。そして、あだ名が「ドル箱」とつけられた。働いてお金になるから。作品を並べるとさ、売れるわけ。それから、熊彫りをはじめた。”

白老という町について

“水の豊富な町だから、木がどんどん増えたと思う。材料が手に入りやすくて。古くから「アイヌコタン」というのがあって、そこにお客さんが来て販売すると熊の木彫作品が売れる。生活の糧だった。最高に良い街だと思う。”

次の世代へつなぐ

“後継者がたった1人とか、2〜3人になっただとしても、一から材料を見て、彫り出せる職人をやっぱり残していかなきゃいけない。だから、やりたいという人には教えるし教えていきたい。”



コロボツクルの制作で心がけていること

“最初に、木に「お前、コロボツクルになるんだから言う事聞けよ」って言いながら作り出す。そして「お前を買ってくれるお客さんのためにちゃんと見守りするんだぞ」という思いを込めて彫っています。”

作品作りにかける思い

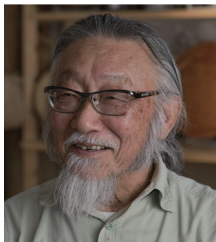
“一昨年のこと。ウポポイで熊の作品を彫ってたから、小学5年生の息子さんとお母さんが来た。「この5,000円の熊が欲しいんだけど、お金がないから、後日で買いに来たい」といった。そこでおじさんの住所教えてほしいといったので名刺を渡した。そしたら1年後、家まで来たんですよ。お小遣いやアルバイトして貯めたお金で、今日買いに行きましたって。その子は、熊のことも勉強しているんですって言った。香川県の高松のお客さんです。こういう人が1人でもいる限り、やっぱり彫るほうはアイヌ民芸品でも、熊でも何でも誠意をもって、お客さんの思いに応えられるものを彫りたいと思います。”



わざ 技

Hands and Hearts
vol. 10





高野 繁廣
Shigehiro
Takano

<略歴>

1950年生まれ。平取町二風谷在住。
20代の頃に旅行で二風谷に立ち寄り、二風谷のアイヌ文化に触れ、特に木彫の魅力と地域住民との交流がきっかけとなり移住する。1972年から故・貝澤守幸氏に師事のもとで木彫り修行を始め、1979年に独立し、翌年「高野民芸」を創業した。アイヌの伝統工芸、伝統文様に深くこだわり、現在に至るまでに生み出し続けている。

<受賞歴>

- ・北海道ウタリ協会(現北海道アイヌ協会)主催 アイヌ民芸品コンクール 最優秀賞(知事賞)(1979)
- ・同コンクール 伝統部門・北海道教育長賞(1988・1995)
- ・同コンクール 伝統部門・審査員特別賞(1989・1990)
- ・アイヌ工芸作品コンテスト(当財団)主催 優秀賞(1997・2001)、入選(2003)
- ・アイヌ伝統工芸師(当財団)認定(2004) 他多数受賞

「教えられた技を 次の世代に伝える」

1972年二風谷に

“二風谷にきたのは1972年の8月末ですね。1人旅でヒッチハイク。貝澤民芸店でアイヌ資料館で来たって聞いて、行ったんです。その時、アイヌのこととか全然知らないで。萱野茂さんのチセに行ったら、おばあちゃんがアイヌ語で喋っているわけですよ、カルチャーショックですよ。その時、お金なかったんです。入場料払ったらもう200円しか残ってなくて、それでアンパン買ったらもうお金がない。野宿しようと、家の軒先を貸してくださいって、軒先にいたんです。そしたら、守幸さんがお前そんなとこで寝てたらクマに食われるから家に入れて、それが守幸さんとの出会いです。”

貝澤守幸さんの弟子になる

“これお前の刃物だって、1本くれたんです。(木彫の)魚を渡されて、こう彫るんだって、少し見せてもらった。そしたら「売り物だからな」って言われたんですよ。練習は全然なかった。”

萱野茂さんからも技を学ぶ

“萱野さんが『アイヌの民具』っていう素晴らしい本を残している。僕にとって、あれは教科書です。400種類書いてあるんです。50年かかって、夫婦2人して、半分作った。僕がモノ作りしていて、分かんないことあったら聞きに行くと、何でも丁寧教えてくれるんですよ。”

37歳で木彫りの講師に推薦される

“先生やってくれて言われた時に、私でいいんですかって。プレッシャーは、ありましたね。何を教えればいいんですかって支部長さんに聞いたら、「アイヌの伝統工芸を教える」って言うんですよ。え、俺が？ みたいな感じですよ。え、とりあえずはアイヌ文様を正しく彫れるようにしようかなと、マニュアルを作ったので、それが今でも生きています。アイヌのことを知らなかった、子たちにアイデンティティーを持たせたみたいなのは持っています。”

指導者として思うこと

“お年寄りがうちに来て、お前に教えておくと、教えてくれた。「自分の息子や孫たちは、自分たちの言うことを全く聞いてくれない」「昔のアイヌの話だ」といって、相手にしてくれなかったらしい。僕は一生懸命聞いたんですよ。それは次の世代に、その思いを伝えてくれて言ってるのと同じだと思ってるんですよ。(自分は)記録に残らない中継ぎ投手でいいんですよ。それでいいと思ってます。”



飯田 米子
Yoneko
Iida

<略歴>

1952年生まれ。札幌市在住。
30代の時に会ったアイヌ文様に魅せられ、これまで数々の作品を手掛けており、札幌市からの依頼で作成したタペストリーが、札幌市役所(1階ロビー)で展示されている。現在でも伝統工芸複製助成事業やアドバイザー派遣事業(当財団事業)をはじめ、さまざまな刺しゅう講座の講師を務める機会も多く、アイヌ文化の普及啓発や人材育成にも尽力している。

<受賞歴>

- ・北海道アイヌ伝統工芸展(北海道アイヌ協会)優秀賞(2000・2004)
- ・アイヌ工芸作品コンテスト(当財団)奨励賞(2011)
- ・北海道アイヌ伝統工芸展(北海道アイヌ協会)最優秀賞(2013)
- ・優秀工芸師(北海道アイヌ協会)認定(2013)

「自分が買いたいと思えるものを作る」

36歳で初めてアイヌ文様に出会う

“アイヌ文様の布製品づくりを手掛けてきた。アイヌ文様を描くのが好き。作り始めたら、どんな作品になるのか、楽しみではない。アイヌ文様に魅せられた。”

加藤町子さんから技を学ぶ

“とても尊敬する先生。縫い物は口(言葉)で教えることが難しい。町子先生に聞いたら「黙って見ていなさい」と言われ、休憩時間も先生の傍で黙って見て覚えた。針の先をうまく使えば、まち針は使わず、針だけで円を縫うことができる。まち針を使わないやり方は、町子先生のやり方を見て覚えた。”

発想の原点

“発想の原点は、いろんなものを見ること。展示会によく見に行き、「自分だったらこうする」とか「こういうやり方もあるんだ」とか、色々見てきた。アイヌ文様をどうやって仕上げているかを見るのが好き。良いと思った文様はスケッチしておく。それをためておき、アレンジしてみたり。”

制作する上で気にしていること

“毎回、生地選び、これが一番苦勞する。(柄の布は)すべて古布を使っている、すごく重みがあって今回も生地に助けられたという部分が結構ある。8割がたは、生地に助けられていると思う。”

図案を考える時が一番の楽しみ

“アイヌ文様は真ん中から外側に向かって止まることがないと思う。だんだん私の作った文様が見えてくのが楽しみ。オリジナルの文様なので、どんな感じに出来上がるか。書くだけでなく、生地をカットしていくことで、文様が見えてくるのでそれが楽しみ。”

大切にしていること

“一番自分の悪いところは、これでもかかってくらい模様を入れちゃう。少し簡単にすればいいんですけど。疲れたら壁にかけて眺めるんです。それを見て、「ここもう少し、もう少し頑張ろう」という気持ちになる。やはり自分で買えるか、買えないか、自分で買わないものを誰が買うのか、それを頭の中に置いている。”

